

小原國芳の全人教育思想におけるティーレ「宗教学」の受容

—『教育の根本問題としての宗教』における引用文の分析を通して—

杉山 倫也（教育学部）

小原國芳・全人教育思想・宗教学

1. はじめに

本研究の課題は、小原國芳の全人教育思想における「宗教論」の形成過程を明らかにするところにある。本稿では、拙稿「小原國芳の全人教育思想における『宗教論』の形成過程」（以下「形成過程」）の課題をさらに詳細に分析する。

その一環として、特に小原がティーレ (Tiele, Cornelis Petrus, 1830-1902) の「宗教学」をどのように受容したのかを考察する。

「形成過程」において、知り得た事柄と課題を次のように記した。¹

「1）『教育の根本問題としての宗教』におけるティーレの引用・要約は『チ氏宗教学原論』からである。

2）『教育の根本問題としての宗教』第一編第一章「宗教論」における引用・要約は、『チ氏宗教学原論』第二部宗教本質論からである。

3）ティーレの引用・要約の箇所を含む、その前後にも引用・要約がある。「チーレ」と名前を挙げているところ以外にも、ティーレの言葉を使用している。

4）引用文中、引用元原文にはない言葉がある。

5）ティーレの文章中に「全人」という言葉がある。小原はまるで、それを避けるかのように、引用している。卒業論文下書きには存在した。」

これを受け、次のような課題を提示した。

「①『チ氏宗教学原論』が「供述」であった事実を踏まえ、『宗教学原論』の原典との対照をする。

②『教育の根本問題としての宗教』第一編第一章以外の各章におけるティーレの引用・要約を『チ氏宗教学原論』と対照し確認する。

③他の論者、例えばシュライアマハー、ジェイムズ等についても同様の作業をする。

④①②③を『宗教教育論』にまで広げる。

⑤卒業論文を含め、版改訂による加筆・削除の状況を確認する。」

本稿では、この①②を中心に実施・考察する。

「形成過程」において分析のための底本としたテキス

トは次の通りである。

1）小原國芳『教育の根本問題としての宗教』, 玉川大学出版部, 1975年。

本稿では第十九版（『小原國芳全集』）を使用する。

2）鈴木宗忠・早船慧雲供述, 『チ氏宗教学原論』内田老鶴圃, 1916年。

本稿ではこれに加え次のテキストを使用する。

3）鯉坂國芳『教育の根本問題としての宗教』, 集成社, 1919年。

また、⑤に関連した作業として、1920年、大正5年第五版との対比を実施・考察する。卒業論文について本稿では扱わない。

本書について少し立ち止まって説明しておこう。

周知の通り、『教育の根本問題としての宗教』は京都帝国大学の卒業論文「宗教による教育の救済」を大幅に改訂して出版した著作である。これを出版したのが集成社である。経営者は鹿児島先輩加治木武助であった。『教育とわが生涯』に次のような記述がある。

「数日して最初に応募してきたのが鹿児島出身の加治木卓郎といった。父武助が鹿児島師範出身で小原の先輩にあたる。武助はのち『集成社』という出版社をおこし、小原の著書を出すのが、最初の応募者が鹿児島出身だったことは、小原を喜ばせた。」²

集成社からは他にも出版があった。次の通りである。

『思想問題と教育』（1919）, 『婦人問題と教育』（1920）, 『修身教授革新論』（1920）, 『修身教授の実際（上・下）』（1921）。

『玉川学園五十年史』にはこうある。

「著作の売れゆきはよかったが、集成社の業績はかんばんしくなく、印税の支払いも円滑にいかんかつたらしい。」³

1922年、大正11年、イデア書院の設立となる。

ただし、『教育の根本問題としての宗教』については集成社からの出版が続いた。したがって、イデア書院版の同書はない。

4) *Elements in the Science of Religion*, Edinburgh

And London: W. Blackwood and Sons, 1897-99.

本書は2)『チ氏宗教学原論』の原書である。

本稿において使用するものは、Leopold Classical Library が出版しているペーパーバックである。内容は、W. Blackwood and Sons 社版のコピーである。他に Leopold Classical Library では Charles Scribner's Sons 社の 1899 年版も出版している。これもまた同じ版のコピーである。他にもいくつかの版がある。

2. 集成社版と玉川大学出版部版

繰り返しになる。『教育の根本問題としての宗教』は京都帝国大学の卒業論文「宗教による教育の救済」を大幅に改訂して出版した著作である。これを最初に出版したのは集成社である。後に、玉川大学出版部（以下「出版部」とする。）にて出版するようになる。

集成社版と出版部版の内容は同じなのか。それとも改訂があったのか。大枠の目次構成を確認しておこう。

表 1

『教育の根本問題としての宗教』集成社版・玉川大学出版部版の目次構成対照

集成社	玉川大学出版部
第一編 本質論 第一章 宗教論 第二章 教育本質論 第三章 教育の内容としての科学、道徳及び藝術と宗教の関係 第四節 結論(本質上より見たる兩者の一致点)	第一編 本質論 第一章 宗教論 第二章 教育の内容としての科学、道徳及び藝術と宗教の関係
第二編 関係論 第一章 児童論と宗教 第二章 目的論と宗教 第三章 知育論と宗教 第四章 徳育論と宗教	第二編 関係論 第四章 児童論と宗教 第五章 目的論と宗教 第六章 眞育と宗教 第七章 善育と宗教 第二節 第三項 宗教と人生観 第三節 宗教教育の実際
第五章 美育と宗教	第八章 美育と宗教

第六章 體育と宗教	第九章 健育と宗教 第十章 富育と宗教
第七章 教師論(結論)	第十一章 教師論(結論)
第三編 宗教の差異と教育 第一章 歴史的觀察 第二章 吾人の要求する宗教(歸結)	第三編 宗教の差異と教育 第一章 歴史的觀察 第二章 吾人の要求する宗教(歸結)

大きな構成上の差異のみ確認しておこう。

①集成社版には第二章として「教育本質論」(74-142)がある。出版部版にはない。

②集成社版には第三章の第四節として「結論(本質上より見たる兩者の一致点)」(117-124)がある。出版部版にはない。

③第二編以降、集成社版では第一章、二章と続く。出版部版では四章、五章と続く。

④集成社版では、第三章「知育論と宗教」、第四章「徳育論と宗教」、第五章「美育」、第六章「體育と宗教」という表記である。出版部版では、それぞれ「眞育と宗教」「善育と宗教」「美育と宗教」「健育と宗教」となっている。「美育」はそのままである。そこに「富育と宗教」が加わっている。言うまでもなく「真・善・美・聖・健・富」に対応した形の改訂をおこなっている。

⑤出版部版の第七章の「善育と宗教」では第二節の中に第三項「宗教と人生観」が加わっている。また第三節として「宗教教育の実際」が加わっている。

当然ながら、集成社版と出版部版の間には二つの歴史的な出来事がある。ひとつは 1921 年「八大教育主張講演会」における「全人教育」の提唱である。もうひとつが 1929 年の玉川学園創設である。それらを背景とした改訂であったのは明白である。

それぞれの改訂における差異の詳細な内容について本稿では扱わない。機を改めて検討する予定である。

3. 波多野精一と「宗教学」

「形成過程」には次のような仮説があった。

「小原の『全人教育思想』における『宗教論』の形成には、近代の自由主義神学が影響している。それは、例えば、本稿で扱ったアルミニウス主義のティーレの著書を通じて伝わっていった。それは新しい『宗教学』という形をとっていた。」⁴

「宗教学」という学問分野は新しい。

『哲学・思想事典』の説明を見ておこう。

「19世紀後半のヨーロッパに成立した経験科学的な宗教研究の総称‘science of religion’の語はM.ミュラーが最初に用いたものであるが、その背景にはキリスト教神学の拘束から自由な宗教研究を求めた啓蒙主義の長い歴史があり、宗教学は啓蒙の子であると言われる。神学が護教学的な学であり宗教研究であるのにたいして、宗教学はそうではない。宗教学が『経験科学的』であるとはこの意味でまず『非神学的』であるという意味である。また宗教学は当時の西欧宗教哲学が強くキリスト教神学の影響下にあった度合いに応じてそれとも一線を画するものであった。」⁵

「宗教学」は「非神学的」な宗教研究である。「護教学」ではない。つまり、それはキリスト教の信仰に基づく、キリスト教のための研究ではない。「経験科学的」な宗教研究である。これが、19世紀末の西洋社会において成立した。

その背景には自由主義神学があった。自由主義神学もまた啓蒙主義的な合理性を背景として成立した。その特徴は、他の宗教宗派についての寛容性、人間の可能性を強調するヒューマンイズム、そして社会改革の主張、等であった。⁶

「宗教学」の創始者がミュラー（Müller, Friedrich Max, 1823-1900）である。ミュラーは1888年にグラスゴー大学におけるギフォード・レクチャーを行う。

「自然宗教」「物理的宗教」「人間学的宗教」「神智学あるいは心理学的宗教」の連続講義であった。⁷

宗教学創始者のひとりであるティーレも1896年、1897年のエジンバラ大学におけるギフォード・レクチャーを行っている。

小原がティーレを通して「宗教学」に触れるのは、それから20年後である。当時の学問研究の状況からすれば、ほぼ同時代であったと言ってよい。

では、ティーレ「宗教学」はどのようにして小原に伝わったのか。小原は、どのようにしてティーレ『宗教学原論』を手にしたのか。その手がかりとなるのが波多野精一（1877-1950）である。

波多野精一との出会いは、『教育の根本問題としての宗教』における「宗教論」に影響を与えた。

波多野は1917年、大正6年12月に京都大学にやってきた。この時、小原は大学三年生であった。翌年の7月の卒業前、約半年である。短いながらも、小原に大きな影響を与える。

石橋哲成はこう表現する。⁸

「クリスチャンの立場から宗教学を研究していた國芳にとっては、幸運なことであった。」

「……波多野教授に論文指導を受け得たことは幸運なことであった。」

波多野は後の小原の卒業論文にどう影響したか。それを物語る記述が『小原國芳自伝』（以下『自伝』）にある。次に引用を三つ示す。⁹

「しかも、私の卒業論文は『教育の根本問題としての宗教』といった、とんでもない大きな間口の広い問題を選んだのです。審査委員は自然、教育の小西重直先生、倫理の藤井健次郎先生、宗教の松本文三郎先生。宗教に関する御指導や参考書を松本先生に、いろいろ教えて頂いて苦労しとる最中に、波多野先生が赴任されたのです。参考書がガラリと変わったのです。『そんな本は古い本だ』というワケで。オカゲで勉強にはなりましたが、大変でした。」

また、論文について波多野に相談した際の記述にも手がかりとなる箇所がある。

「論文の相談を申し上げると、一々親切に研究方向に方法、そしていろいろの書名を教えて下さる。大部分ドイツ語の原書。ヒロシマで英語科を出た私、ドイツ語は殊の外、へたな私。これは大変だと思いました。」

別の箇所にもこういう記述がある。

「宗教学の松本文三先生が最初、宗教問題は指導してくださいましたが、途中で、波多野先生が京大へ御赴任。宗教哲学の指導教官が波多野先生に変わるワケです。御訪問したら、今までの参考書がダメなのです。殊に、御指導下さる本はドイツ語の本が多いワケです。中々、ホンヤクもないし、往生しました。英語の本ならかなり読みこなしましたが。」

以上からわかるポイントをまとめるとこうなる。

- ①「参考書がガラリと変わった」
- ②「大部分ドイツ語の原書」
- ③「中々、ホンヤクもない」
- ④「ドイツ語は殊の外、へたな私。」
- ⑤「英語の本ならかなり読みこなしました」

これらのポイントを手がかりに、小原のティーレ受容過程を見ていこう。

4. ティーレ「宗教学」の受容

①「参考書がガラリと変わった」点からである。

周知の通り、当時の帝国大学は、三年制、9月入学、7月卒業である。波多野の赴任が、小原三年生の時の12月である。この段階での「参考書がガラリと変わった」は大事であっただろう。

では、どう変わったのか。

その手がかりは『波多野精一全集』（以下『波多野全集』）にある。

『波多野全集』第三巻は「西洋宗教思想史（希臘の巻）」「宗教哲学の本質及其根本問題」そして「宗教哲学序論」を所収している。同書の「解説」の内容にしたがって説明していく。¹⁰

「解説」を執筆しているのは菅圓吉（1895-1972）である。神学者であり、日本聖公会の司祭でもあった。立教大学文学部にキリスト教学科を創設している。

菅は大正五年に京都大学哲学科（宗教学専攻）に入学した。1917年、大正6年12月に波多野が宗教学の主任教授として赴任する。波多野は直ちに「宗教学概論」の講義を始める。菅は二年生の時その講義を聴いた。曰く「波多野門下の第一回生」である。

当時、小原は教育学専攻三年生であった。この講義には出席していたであろう。菅と小原は同じ講義室にて波多野の「宗教学概論」講義を聴いた公算が高い。つまり、菅の伝える「宗教学概論」の内容は、そのまま小原の受講した内容であると判断してよい。

「宗教学概論」の内容は、菅によれば、「宗教哲学の本質及其根本問題」と「殆ど全く同一内容」であった。つまり、「宗教学概論」の講義内容は、「宗教哲学の本質及其根本問題」を読めばわかるのである。

「宗教哲学の本質及其根本問題」自体は1920年、大正9年の夏期講習会であった。

ここで注目すべきは、菅が「宗教学概論の古いノート」に記していたとする参考文献である。転記しよう。

Tiele, *Elements in the Science of Religion, Einführung in die Religionswissenschaft*

Pfleiderer, *Religionsphilosophie, Religion und der Religionen*

E. Troeltsch, *Das Wesen der Religion und der Religionwissenschaft* (Die Systematische Christliche Religion)

この他の講義では、宗教史とギリシア宗教史に関する文献が多数ある。ここでは「宗教学概論」講義に限定しておく。

筆頭にティーレ『宗教学原論』がある。

その翻訳書が、鈴木宗忠・早船慧雲供述、『チ氏宗教学原論』である。1916年、大正5年に出版となった。

二冊目にあるのはプライデラー（Pfleiderer, Otto, 1839-1908）の『宗教哲学』である。本書はおそらく、次のような書名である。

Religionsphilosophie auf geschichtlichen

Grundlage (1878).

英語訳もある。*The Philosophy of Religion on the Basis of its History.*

プライデラーの日本語訳書として『宗教哲学史』（1928年）がある。ただし、原題は *Geschichte der Religionsphilosophie* である。これは『宗教哲学』とは別の書物である。

Religion and Religionen (1906), published in English as *Religion and Historic Faiths* (1907)

本書の日本語訳『宗教の本質と各宗の特質』が1924年に出ている。¹¹

波多野は明治37年（1904年）から、早稲田大学の奨学資金により、二年間ドイツに留学している。その際、ベルリン大学やハイデルベルク大学に学ぶ機会を得た。¹²

ベルリン大学において、プライデラーの講義に出席した。また、ハイデルベルク大学においては、新しい宗教史学派の学風に共鳴した。

その代表者が三冊目のトレルチ（Troeltsch, Ernst, 1865-1923）である。トレルチは著名な神学者・宗教哲学者である。日本でも『ルネサンスと宗教改革』（岩波文庫）など、多数の翻訳書がある。波多野はトレルチの講義にひきつけられたそうである。

参考文献にあるトレルチの本について、書名としては確認できていない。可能性としては、1906年の『現代文化』（Die Kultur der Gegenwart）所収の論文である。

このトレルチの論考を参考文献として挙げている点について、菅はこう記している。

「波多野がこの講義をした頃は明らかに新カント學派の價值哲學の影響下にあり、従って彼の宗教學はトレルチの宗教學の考え方とほぼ同じ内容のものであった。……<略>……とにかくトレルチの宗教學乃至宗教哲學の考え方からすれば、カント・シュライエルマッヘルの線に沿って進まねばならないのだから、『宗教哲学の本質及其根本問題』に附録として『カントの宗教哲学について』を付け加えたことは尤もである。」¹³

波多野の宗教学がトレルチ宗教学と「ほぼ同じ内容」という指摘である。それがカント・シュライアマー（Schleiermacher, Friedrich Daniel Ernst, 1768-1834）の「線に沿って進」む、という。

周知の通り、小原の『教育の根本問題としての宗教』において、シュライアマーの名が多く挙がる。その理由の一端がわかる。

小原は『自伝』においてこう述懐する。卒業論文口頭試問の場面である。以下に見ていこう。¹⁴

『大分、読んだようだが、その中、誰の本が一番力になりましたか』

と波多野先生。……<略>……

『シュライエルマッヘルの宗教論でした』

と答える。私にとっては一番、深い感銘を与えてくれた本でしたから。先生はこれだけの質問でしたが、その答が当を得たか得ないか、長い間の気がかりの一つでした。」

さらに三十年後のエピソードが続く。玉川大学出版部から「世界の宗教や哲学や教育の一流古典の原典」を出したい、という話である。

小原は「どんな本を出したほうがよいでしょうか」と問い、いろいろな書物を挙げた。その際「シュライエルマッヘルの『宗教論』などは如何でしょうか。」と問う。

波多野が「うん、あれはいい本だ、ぜひ加えねばならない」と答える。

小原はこう捉える。

『卒業の時の口頭試問の答は、まあまあ及第だったのか』と、六十を過ぎて、子供のようにうれしいことでした。」

前述の菅の指摘から考察するに、波多野の「宗教学概論」講義が小原に大きな影響を与えていた、とわかる。特に、『教育の根本問題としての宗教』における「宗教論」の内容構成に与えた影響は大きい。無論、それをきっかけとした「師弟関係」の影響も大きい。

ここで、前述の②「大部分ドイツ語の原書」、③「中々、ホンヤクもない」を取り上げてみよう。

先に取り上げた、ティーレ、プライデラー、そしてトレルチの書物のうち、ティーレ以外の書物は「ドイツ語の本」である。ティーレの『宗教学原論』は、ギフォードレクチャーの講義として英語版である。それからオランダ語訳が出ている。他の言語への翻訳はそれ以降である。

日本語訳書については、前述の通り、ティーレの『チ氏宗教学原論』が1916年、大正5年に出版となっている。プライデラーについては『自由神学』が1892年、明治25年、『基督教の真相』が1895年、明治28年、に出ている。ただし、波多野の挙げた参考文献には含まれていない。

菅は、他の講義の参考文献も記載している。その多くは、やはり「ドイツ語の本」である。

さらに前述の④「ドイツ語は殊の外、へたな私」、

⑤「英語の本ならかなり読みこなしました」をあわせ考えるとこうなる。

この段階において、波多野の薦める本のうち、原典にあたるのであれば英語、日本語訳が存在するのは、ティーレ『宗教学原論』である。

内容的にも卒業論文執筆という作業的にも、ティーレが主文献となっていくのは当然の帰結である。

ちなみに、1914年、大正3年、にはシュライアマハーの『宗教論』の翻訳書（石原謙訳）が出ている。『教育の根本問題としての宗教』におけるシュライアマハーの引用は、ティーレについて多い。訳者の石原謙は、『チ氏宗教学原論』の訳者のひとり早船慧雲と一高の同級生である。¹⁵

こういう事情から、シュライアマハーも主文献となるのは当然の流れであった。

5. 引用文対比

ここにひとつ問題がある。

『チ氏宗教学原論』は *Elements in the Science of Religion* の鈴木・早船による「供述」である。それは「文字通りに直譯しないで、自由に意譯した」翻訳書である。また「不必要と思ふ箇所は省略し」てある。「叙述の順序を變更」もしてある。結果「二編を一冊」にした。それが『チ氏宗教学原論』である。¹⁶

鈴木・早船は、そもそも仏教学者であった。「自由に意譯」や「不必要と思ふ箇所は省略」はどれほどであったのだろうか。

小原はそれを主文献の一冊として『教育の根本問題としての宗教』(「宗教による教育の救済」)を執筆した。引用は『チ氏宗教学原論』からである。

すると、確認すべきは、ティーレの原書の内容が適切に小原まで行き届いているか、である。

以下に引用文を対比していこう。

小原は『教育の根本問題としての宗教』(出版部版)の第一編第一章において「チーレ」すなわちティーレの言葉を20箇所引用している。¹⁷

紙幅の関係から、この20箇所のうちいくつかを抜粋して検討していこう。該当の文・文章を表の形によって示す。表のヘッダには、『教育の根本問題としての宗教』において該当の文・文章の登場する「節」を示しておく。表自体にはタイトルを付けない。

①『教育の根本問題としての宗教』(出版部版)、②『教育の根本問題としての宗教』(集成社版)、③『チ氏宗教学原論』、そして④*Elements in the Science of Religion*の順に対比していこう。煩雑になるので上記

を①②③④と番号にて示していく。すでに各々の書物について本文中で紹介しているので、註はつけない。代わりに、文・文章の末尾（ ）内に該当ページ数を入れておく。

全般的には、次のようである。

①においては②の旧漢字・旧仮名遣いを新漢字・現代仮名遣いへと書き換えている。

①②では、③を引用している。(部分的に語句が変わっている場合がある。)

あるいは、①②では、③の数ページから必要な文・文章を使用し構成している。要約をしている。

④から③への意識はない。

鈴木・早船は「文字通りに直譯しないで、自由に意譯した」と言う。実際は、原文に忠実な訳である。¹⁸

これ以外に特筆すべき事項に限定して紹介していこう。以下、上記に指摘した事項については省略する。

表2

第二節宗教的要求宗教の起源、人の本性、要求	
①	(3) 特殊な宗教的感情に求むるものであるが、これはゲーテがいった通り「人は、丁度よい時にうまい考がでないで、往々にして當もないことを云うものである」が、チーレの云う通り、この説は考に窮したというという事の外に何者をも説明しない。(8-9)
②	(3) 特殊なる宗教的感情に求むるものであるが、これはゲーテがいった通り「人は、丁度よい時にうまい考がでないで、往々にして當もないことを云うものである」が、チーレの云ふ通り、この説は考に窮したというという事の外に何者をも説明しない。(9)
③	宗教が推理作用の所産であり得ないとすれば、其起源を情操の中に見たらば如何がであらうか。此方向にも亦己に種々な企がなされた。宗教の源泉は特殊な宗教的感情に求められなければならぬと宣言するのは適當なことであると従来考へられて居た。併しこゝに吾人はかの有名なゲーテの語「丁度よい時に甘い考が出ないと、往々にして人は當もないことを云ふものである」を想ひ起(旧字)こさざるを得ない。何となれば此解釋はそれを提出した学者が不幸にして考に窮したに相違ないといふことの外、何者をも

	説明しない説明であるからである。(428-429) …… 吾人はシュライエルマッヘルが宗教の源泉を求めた「絶対憑依の感」から何の助けをも得ない。
④	If religion cannot be the product of reasoning, we may perhaps try to find its origin in sentiment. In this direction also various attempts have already been made. It has been thought sufficient to lay it down that the source of religion must be sought for in a special religious sense or feelings - a solution of the problem which reminds us of a well-known saying of Goethe, that, where thoughts are lacking at the right time, a word is often aimlessly uttered. For this is an explanation that explains nothing, except that the philosopher who propounded it must have been sadly at a loss for ideas. ……Nor do we get any help from the "unconditional sense of dependence" in which Schleiermacher seeks for the source of religion. (221-222)

①②では、③の文章における下線部を抜粋し文章を構成している。数ページ分を要約している。

該当箇所には、ティーレによる次の記述がある。

「吾人はシュライエルマッヘルが宗教の源泉を求めた『絶対憑依の感』から何の助けをも得ない。」

ティーレは「宗教の源泉」を「特殊な宗教的感情に」求める説について「考に窮した」という。無論、シュライアマハーの「絶対憑依の感」も例外ではない。

小原はティーレの説を踏襲している。ところが、このシュライアマハーへの言及を引用していない。

前述したとおり、シュライアマハーが主文献となる流れにあつては不要だったのであろう。

表3

第二節宗教的要求宗教の起源、人の本性、要求	
①	しかもこれは確かに「人間の本性に根ざしておる」ことは前にも述べたが、詳言すれば「人間精神の奥底から発している」(チーレ)のである。(14)

	Religion is certainly rooted in man's nature; that is springs from his inmost soul.
②	しかもこれは確かに「人間の本性に根ざしてゐる」ことは前にも述べたが、詳言すれば「人間精神の奥底から発している」(チーレ)のである。(15) Religion is certainly rooted in man's nature; that is springs from his inmost [sic] soul.
③	「宗教は確に人間の自然性に根ざして居る—詳言すれば、人間精神の奥底から奥底から発して居る。」(11)
④	Religion is certainly rooted in man's nature; that is springs from his inmost soul. (Part. I, 15)

①②の特徴としては、英文を併記している点である。②の“immost”は誤植であろう。①になると“inmost”と、正しい綴りになっている。

①②は、③の文における下線部の部分的引用である。文脈にも適っている。ただし、翻訳書には英文がない。

『教育の根本問題としての宗教』第一章において、①②のようなスタイル、つまり引用文に原文(英文もしくは独文)を併記しているところは六ヶ所ある。引用元の人物としては、1) ホール、2) シュライアマハー、3) ティーレ、4) コー、5) ナトルプ、6) ジェイムズ、である。参考までに提示しておこう。

表4
原文併記の引用

1)	ホールは次の如く云っている。「宗教とは個人や種族が、宇宙に於いて、その眞の地位への復帰である。健全や十全への回復である」。 Religion is the reinstallation of the individual or the race into its true place in the world, recovery to health or wholeness. (4)
2)	宗教を本体論的に考えてみれば、シュライエルマッヘルが云う通り、「個々なるものゝ凡てを全体の一部として、制限された凡てを無制限者の表現として見る。之が宗教である」。 Alle Einzelne ein Teil des Ganzen, alles Bechränkte eine Darstellung des

	Unendlichen hinnehmen, das ist Religion. (6)
3)	しかもこれは確かに「人間の本性に根ざしておる」ことは前にも述べたが、詳言すれば「人間精神の奥底から発している」(チーレ)のである。 Religion is certainly rooted in man's nature; that is springs from his inmost soul. (14)
4)	しかも「人間人格の本質的因素をなす」(コー)のである。 Religion is an essential factor of the human personality. (14)
5)	要するに「人類の全世界は神霊ということの理想を構成する爲に必要なのである」(ナトルプ) das Ganze Universum des Menschentums muss dienen, die Idee des Göttlichen aufzueruen. (23)
6)	「本能は導く、叡智は従うに過ぎない」のである。 Instinct leads, intelligence does but follow. (54)

このような表記は何を意味するのだろうか。推測できるのは、さしあたり三点ある。

一点目、数多く挙げた人物及びその言葉の中から、最も強調したい文・文章を取り上げた。

二点目、自身の主張を最もよく代弁している文・文章を取り上げた。

三点目、翻訳のみではなく、原典までさかのぼって読んでいるとの証左としてあえて表記した。

表5

第四節 宗教の成分	
①	……然るに「宗教に於ては、此等の要求が一樣に働いて、もしその均衡を失えば、その結果は宗教の病的状態が起る。即ち宗教は全的生活である」。以上がチーレの説明である。(36)
②	……然るに「宗教に於ては、此等の要求が一樣に働いて、もしその均衡を失へば、その結果は宗教の病的状態が起る。即ち宗教は全的生活である」。以上がチーレの説明である。

	(41)
③	然るに、宗教に於ては此等の要求が一樣に働いて、若し其均衡を失へば、その結果は宗教の病的状態が起る。(263)
④	In religion, on the other hand, all these factors operate alike, and if their equilibrium be disturbed, a morbid condition of religion is the result. (23)

①②では、③の文章をほぼそのまま抜粋している。ところが、「即ち宗教は全的生活である」は、③にも④にも見当たらない。つまり、原文にない一文であった。

本稿冒頭に示した「4）引用文中、引用元原文にはない言葉がある。」の箇所である。

おそらく、この一文は小原自身の言葉である。「起る」の後に来るべき「閉じ鉤括弧」が「全的生活である」の後に来ただけであろう。それが、執筆時であったのか、出版時であったのかについては、卒業論文原本にて確認する必要がある。

次の表6においても、小原は「宗教は全的生活」というフレーズを用いている。これは小原のオリジナルなフレーズと言ってよい。

表6

第四節 宗教の成分	
①	実に宗教は全的生活でなければならぬ。また宗教が單に、或は知的一面のものでなく、或は感情一方に偏すべきものでなく、或は意志の方面のみに片寄るべきものでなく、全的生活でなければならぬということはチーレのいう通り「宗教が吾人の精神生活の最も深い根柢もしくは、むしろその中心を構成して居るといふ事実の中に発見せられる」のである。「宗教は吾人を抱擁する」という言葉はもし一度吾人の心の中に起つて活動せる宗教は吾人の全生活を支配すると云ふ意味ならば十分正確である」と、彼チーレは云っている。(36)
②	實に宗教は全的生活でなければならぬ。また宗教が單に、或は知的一面のものでなく、或は感情一方に偏すべきものでなく、或は意志の方面のみに片寄るべきものでなく、全的生活でなければならぬといふことはチーレのいふ通り「宗教が吾人の精神生活の最も深い

	根柢もしくは、むしろその中心を構成して居るといふ事実の中に発見せられる」のである。 「宗教は全人を抱擁する」と云ふ言葉は若し一度吾人の心の中に起つて活動せる宗教は吾人の全生活を支配すると云ふ意味ならば十分正確である」と、彼チーレは云っている。
③	此は何故であるか。其答は宗教は吾人の精神生活の最も深き根柢、或は寧ろ其の中心を構成するといふ事実の中に発見せられる。或はよく云ふ言葉に従つて之を云えば「 <u>宗教は全人（ホール、マン）を抱擁する</u> 」。此言葉は、若し一度吾人の心の内に起こつて活動せる宗教は吾人の全生活を支配するといふ意味ならば十分正確である。(263)
④	And why is this? The answer is to be found in the fact already pointed out, that religion constitutes the deepest foundation, or rather the very centre, of our spiritual life. Or, as it is sometimes expressed, " <u>religion embraces the whole man.</u> " if this means that religion, once awakened and quickened within our souls, sways our whole lives, nothing can be more certain. (23)

①から②の書き換えについて注目すべき点がある。それぞれの下線部である。

本稿冒頭において、次のように示した。

「5）ティーレの文章中に『全人』という言葉がある。小原はまるで、それを避けるかのように、引用している。卒業論文下書きには存在した。」

集成社版にも存在している。

具体的には②「宗教は全人を抱擁する」（集成社版）が①「宗教は吾人を抱擁する」（出版部版）に変更となっている。卒業論文および集成社版にあった「全人」が、出版部版では「吾人」になっている。

③では「宗教は全人（ホール、マン）を抱擁する」となっている。②では「（ホール、マン）」を削除している。

つまり「全人」という語を用いたのはティーレであった。それを鈴木・早船は、そのまま「全人（ホール、マン）」と訳した。それを集成社版では「全人」とし、出版部版では「吾人」となった。

前述したとおり、集成社版と出版部版の間には二つの歴史的な出来事があった。ひとつは1921年「八大教育主張講演会」における「全人教育」の提唱である。もうひとつが1929年の玉川学園創設である。表1に示した目次構成の変更とともに、それらの出来事を背景とした改訂であったのだろう。

つまり、出版部版の『教育の根本問題としての宗教』へと改訂するための変更であったのだろう。思想の変更ではなく、出版事情からの変更と理解してよい。

というのも、この「全人を抱擁する」というフレーズは、小原宗教論において、重要なキーフレーズとなっているからである。

『宗教教育論』（1972年）において、小原は「吾人の要求する宗教」として十箇条を挙げている。その中に「六、全的生活、全人を抱擁するもの。」がある。¹⁹

卒業論文執筆から50年以上経てなお、このフレーズは残り続けたのである。

この点について、もうひとつ指摘すべき事柄がある。それは次の表7にある。

表7

第四節 宗教の成分	
①	もしそうだとすればチーレの説くように「宗教は墮落して主智主義、狂信神秘主義、主徳主義或は外の熱狂的のものとなるだろう。宗教に於ては、人のすべての能力が共に融和して働くべきであつて、その中の一つが上位に立つてはならぬ」。(37)
②	若し然りとすればチーレの説く如く「宗教は墮落して主智主義、狂信神秘主義、主徳主義或は外の熱狂的のものとなるだろう。宗教に於ては、人のすべての能力が共に融和して働くべきであつて、その中の一つが上位に立つてはならぬ」。(43)
③	若しさうすれば、宗教は墮落して主知主義、狂信主義、神秘主義、主徳主義、或は他の狂熱的なものになるであらう。宗教に於ては人の總ての能力が共に調和して働くべきであつて其中の一つとして上位に立つてはならぬ。(451)
④	In religion, on the other hand, as we have already observed, none of these functions can have the mastery, as otherwise religion would degenerate into intellectualism,

fanaticism. Mysticism, moralism, or some other craze. I religion all one's faculties must work together in harmony, none being entitled to precedence. (247-248)
--

①②では、③を引用している。

ティーレの書の中には、もう一箇所「全人」を取り上げている箇所がある。小原が引用した部分の続きにある次の文章である。

『宗教は全人を包容す』とか『宗教は人間精神の中心点を占有す』といふ様な古い諺は恐らく厳密には正確でなからうが、兎に角其中に含まれた大切な結論が今迄は見出されずに居った。併し此等の諺は、人々が久しい以前から宗教の多方面なことを悟っていたことを証明するものである。²⁰

ここには「宗教は全人を包容す」とある。前述した表6では「宗教は全人を抱擁する」であった。原文はどちらも"religion embraces the whole man"である。

“embrace”の訳が二種類ある。「抱擁」と「包容」である。日本語訳としては、どちらも使用できる。

この違いは、訳者が異なったからだろう。いずれかが鈴木、いずれかが早船であったのだろう。

小原が後の『宗教教育論』において使用したのは「抱擁」である。もちろん「包容」の箇所は、引用文のすぐ後に続くので、目に入っていると想定できる。

6. おわりに

本稿冒頭に示した課題にそって、知り得た事柄を確認していこう。

①『チ氏宗教学原論』が「供述」であった事実を踏まえ、『宗教学原論』の原典との対照をする。

鈴木・早船は「文字通りに直譯しないで、自由に意譯した」と言う。実際は、原文に忠実な訳であった。

②『教育の根本問題としての宗教』第一編第一章以外の各章におけるティーレの引用・要約を『チ氏宗教学原論』と対照し確認する。

小原は『チ氏宗教学原論』の文・文章をほぼそのまま引用している。(部分的に語句が変わっている場合がある。)あるいは、数ページから必要な文・文章を使用し構成し、要約をしている。

①②をあわせて考察すると、小原はティーレの「宗教学」を、翻訳書を通して受容した。その翻訳書は、ティーレ「宗教学」の内容を忠実に伝えていた。少なくとも、小原が引用した箇所には、原典の文意を変えてしまうような意識はなかった。また、小原が原典に

まで戻っていた形跡を確認した。

③他の論者、例えばシュライアマハー、ジェイムズ等についても同様の作業をする。

この二人については、本稿ではわずかながら触れた。他に、ホール、コー、ナトルプ、ジェイムズについても触れた。同様の作業が必要であるとわかった。即ち、『教育の根本問題としての宗教』における引用文について集成社版・出版部版を比較する。さらに翻訳書・原典との照合である。

④①②③を『宗教教育論』にまで広げる。

本稿ではティーレとの関係において、一部分紹介した。『宗教教育論』の「六、全的生活、全人を抱擁するもの。」にティーレの影響を確認した。

仮に小原が、「包容」ではなく「抱擁」を意図的に選択したのであれば、その「人となり」の一端がわかるのかもしれない。「包容」は精神的であり、「抱擁」は身体的、と読めるからである。教育において、常に身体的な具体性を強調する小原らしさ、とも読める。

「全的生活」について、小原はティーレの引用として用いている。ところが、実際にはその言葉はティーレの著書および翻訳書には見当たらない。つまり、小原のオリジナルであったと想定できる。いわば「誤配」がオリジナルなキーワードを生んだのだろう。

⑤卒業論文を含め、版改訂による加筆・削除の状況を確認する。

卒業論文との比較はしていない。

集成社版から出版部版への改訂においてわかった事柄は次の通り。

ティーレの言葉に関わる箇所のはほとんどは、新漢字・現代仮名遣いへの書き換えであった。

変更について、大きなところでは、表1のように目次構成が変わっていた。小さなところでは「全人」から「吾人」になる等の書き換えがあった。

それには、「全人教育」提唱、玉川学園創設、といった歴史的背景が関係しているだろう。

この点については、集成社・イデア書院・玉川大学出版部という系譜についての調査・分析が必要である。

さらに新たな課題がある。

⑥波多野精一の思想的な影響の分析である。

前述した通り、波多野の「宗教学概論」と「宗教哲学の本質及其根本問題」は同内容であった。その内容が、『教育の根本問題としての宗教』にどう影響しているのかを分析する。波多野との出会いが、小原の「宗教論」ひいては「全人教育思想」にどのように影響したのかという課題である。

註

1 杉山倫也「小原國芳の全人教育思想における『宗教論』の形成過程」『全人教育研究センター年報 2017 第5号』, 2018, 39. (以下、「形成過程」)

この論文において次のように記述した。

「5) ティーレの文章中に『全人』という言葉がある。小原はまるで、それを避けるかのように、その前後を引用している。卒業論文下書きには存在した。」

表現上、「その前後を」を削除したほうがより適切であると判断した。

2 小原國芳『教育とわが生涯』, (南日本新聞社編), 玉川大学出版部, 1977, 166.

3 『玉川学園五十年史』, 897.

4 「形成過程」, 39.

5 廣松涉他編『哲学・思想事典』, 岩波書店, 1998, 714.

6 「形成過程」, 34.

7 <https://www.giffordlectures.org/lecturers/friedrich-max-müller> (2022年2月26日最終確認)

8 石橋哲成「京都帝国大学学生時代の國芳」『全人教育研究センター年報 2021 第9号』, 玉川大学教育 学部, 2022, 33;35.

9 小原國芳『小原國芳自伝(2)』玉川大学出版部, 1963, 31-34; 85-86.

煩雑になるので、註はひとつにまとめた。

10 菅圓吉「解説」『波多野精一全集 第三巻』, 岩波書店, 401-402.

煩雑になるので、註はひとつにまとめた。

11 プライデラー, オットー『宗教の本質と各宗の特質』, 中村祐神訳, 早稲田大學出版部, 1924年.

12 宮本武之助『波多野精一』, 日本基督教団出版部, 1965年, 14-15.;石原謙・片山正直・田中美知太郎・松村克己『宗教と哲学の根本にあるもの一波多野精一博士の學業について』, 岩波書店, 1954年, 10-11.

煩雑になるので、註はひとつにまとめた。

13 「解説」, 402.

14 『小原國芳自伝(2)』, 33-34.

煩雑になるので、註はひとつにまとめた。

15 「形成過程」, 36.

16 『チ氏宗教学原論』, 1916年, 12-13.

17 「形成過程」においては19箇所としていた。再度確認したところ20箇所であった。

18 『チ氏宗教学原論』12-13.

19 小原國芳『宗教教育論』, 玉川大学出版部, 1972年, 186-187.

20 『チ氏宗教学原論』451.